



2010年2月16日

片倉工業株式会社
代表取締役社長 竹内彰雄様

社団法人 日本建築家協会 (J I A)

関東甲信越支部	支部長	伊平則夫
同 保存問題委員会	委員長	和田昇三
同 長野地域会	代表	赤羽吉人
同 群馬地域会	代表	神澤宣次

「片倉工業旧本社ビル」の保存活用に関する要望書

拝啓 時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

貴社におかれましては、平成 18 年に国の重要文化財に指定された「旧富岡製糸場」を富岡市に寄付されるなど、日頃より文化の継承にご理解をお示しになっていることに深く敬意を表します。

京橋に位置します「片倉工業旧本社ビル」の存在は、建築界のみならず、広く市民にとっても心惹かれる建物として、東京の重要な歴史的景観を形成しています。それは、建設当時の貴社の企業としての意気込みが、建物の風格となりそのまま人の心を打つ形となって歴史を刻んできた故と思えます。大正 9 年(1920 年)、片倉組から片倉製糸紡績株式会社へ、その時代の中心的産業を担う企業として生まれ変わり、その本社ビルとして、当時の経済の中心地である、宝町に建設された時代の息吹をまざまざと感じます。建物の竣工年は、公開されている資料の中では明らかではありませんが、初めて建築界にその存在が発表されたのが、大正 12 年(1923 年)の雑誌「建築世界17巻参号」の口絵においてでした。その年の9月に発生した関東大震災の後には、その被害を受けた姿が南側からの写真として、同じ「建築世界」の震災特集号にて見ることができます。その後現在の外観になるまで、どのような経過を辿ったのかを知ることはできませんが、昭和 16 年(1941 年)に発行された「片倉製糸紡績株式会社二十年誌」には、ほぼ現在の姿の外観写真が掲載されており、この建物の歴史を確認できます。

「近世復興様式」と呼ぶこの三層構成の外観は、人を魅了してやまないだけでなく、大正 12 年当時の鉄筋コンクリートの 7 階建建造物は、オフィスビルの歴史としても大変貴重な存在であります。当時は、現在の建物より、東西で2スパン小さく、南北でも半分ほどの奥行きではありました。しかし、柔らかな印象の砂岩張りの基段部が、ギリシャ模様のコーニスまで立ち上がり、その上に、(メダリオンはすでに無くなってはいるが)タイル張りの中層部、今は最上部のコーニスは覆われてしまっていて見ることはできませんが、フリーズ風の窓をあしらった頂部、これらの外観は見上げる人々の心を湧き立たせるものです。

この建築史的にも貴重な、人々からも愛され続けている片倉工業旧本社ビルの新しい開発計画への参入が発表され、今は解体への段取りが推し進められていると聞いておりますが、貴社の資産としてだけでなく、広く社会のため、後世のために、継続して活用いただけることを切に要望いたします。そのためには、耐震的な問題等多くの困難な課題が存在しているものと考えられますが、近年の歴史的建造物に対する飛躍的な技術的進歩により克服可能な課題と考えております。記憶に新しい、「富岡製糸場」の官民一体となった世界遺産登録への活動、さらには今も市民の憩いの場となっている諏訪の片倉館の存続を支えた文化的配慮を、この旧本社ビルにもご配慮いただき、都市の記憶としてその存在を開発計画の中で継承していただけることを期待いたします。

なお、社団法人日本建築家協会関東甲信越支部、同保存問題委員会、同長野地域会、同群馬地域会は、「片倉工業旧本社ビル」の保存活用について、できる限りの協力をさせていただき所存であることを申し添えます。

社団法人 日本建築家協会
The Japan Institute of Architects
関東・甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA 館
Tel.03-3408-8291 Fax.03-3408-8294

敬具